



創世記の記録

第2部 創造主が造られた世界

Ⅲ／創造の6日間

著／ヘンリーモリス

訳／宇佐神 正海

— 1976年版 —

第2部 創造主の造られた世界

Ⅲ 創造の六日間（創世記一章三節～二章三節）

日Ⅱ時代説

この章で、創造の一週間の出来事と神のみわざを調べます。創世記の最初の二節は物理的宇宙の基本的構成要素の創造と、最初に神の霊によってそれらに力が与えられたことを記述しています。前章で検討したように、これら二つの出来事は、実際には密接に関連し合っており、創造の第一日の最初の二つの出来事でした。しかし、六日間の残りの出来事を有意義に討議するために、これらの日々が自然の日々としてか、または長い時代の象徴的用語として理解すべきかを決めなければなりません。多くの誠実で有能な聖書学者が、否応なしに地質年代の体系を受け入れざるを得ないと感じて、創世記一章の解釈として推薦される、いわゆる「日Ⅱ時代」説を早まって受け入れてしまったのです。この細工によって、彼らは多かれ少なかれ、創造の日々を進化論に立つ地質年代と等しいことを示そうと努めているのです。

しかしながら、間隙説と同様にこの日Ⅱ時代説は、成立し得ないことを示す圧倒的な多くの問題にぶつかります。まず第一に、一章で物語っている創造の順序は、地質時代を表わす化石の岩石中にあるとされてい

る順序とは非常に違います。これらの矛盾の多くを、説明しながらその都度詳しく取り扱うことにします。

第二に、すでに間隙説の検討の際に指摘したように、地質時代は化石記録によって決定され、化石は苦しみと死が世界を支配していたことを物語っているのであって、日Ⅱ時代説を受け入れることは、とりもなおさず罪が入る前に死が存在していたことを受け入れることになるので、人が罪を犯したため、神のさばきとして人が支配しているこの世に死が入って来たという聖書の教え（ロマ五・一二）に真向から相反するのです。こうして、神が人のための世界を創造し準備するに当たって、苦しみと死は必要な要素であったと仮定することになります。この結果、神を聖書にある恵みと愛の神としてではなく、残虐な恐ろしい鬼のような存在として描くのです。

最後に、聖書の記録自体が、創造の日は文字通りの日々であって、不特定の長い時代ではないことを明らかにしています。このことは、これらの語句の実際の言葉遣いを調べていくと、最終的に明らかになります。たとい、日（yom エーム）というヘブル語がたまたま不特定の時間を意味し得たとしても、一章の特別な構文の前後関係から、このような意味の解釈はどれも不可能です。

もし読者が、「創世記の著者が読者に、万物は文字通り六日間で創造され造られたことを教えたいと考えたら、どのようなことばを用いるだろうか」と自問してください。著者は創世記一章で実際に用いられていることばを用いたに違いないとの答えになるはずす。しかし、もし長い地質年代の考えを伝えようと願っていたなら、ここで著者が選んで用いているよりも、確かに、もっと明瞭で効果的な他のことばを用いたはずです。このことから文字通りの六日間の創造を教える意図をもって書かれたことが明らかです。

それゆえ、一章を解釈する唯一の適切な方法は、一章を全く「解釈」しないことです。すなわち、私たち

は一章で述べられている通りにそのまま受け入れるのです。「創造の日」は文字通りの日々で、記されている出来事は記述されていた方法でその通りに起こったのです。この比類ない聖書の第一章は、他の方法では決して学ぶことのできない創造の歴史を私たちに告げているのです。「それは主が六日のうちに、天と地と海、またそれらの中にいるすべてのものを造り、七日目に休まれたからである。それゆえ、主は安息日を祝福し、これを聖なるものと宣言された」(出二〇・一一)。

一章三～五節 神は「光あれ」と言われた。すると光があつた。神はその光を見て、良しとされた。神はその光とやみとを分けられた。神は光を昼と名づけ、やみを夜と名づけられた。夕となり、また朝となった。第一日である。(協会訳)

地は形のない水の広がりのような状態に創造されましたが、そこは真の暗黒でした。この地に神は大いなる永遠にかかわる目的をもっておられました。まず、神の霊は動きも形もない構成要素に運動と形を与え、ついで暗黒を追い払うために光のエネルギーをもたらしました。

三節は、聖書の中で神が語りかけた最初の記録です。「神が『光よ。あれ。』と仰せられた。すると光ができた。」神のことばこそ光をもたらすものです。父なる神は万物の源です(創一・一)。聖霊はすべてのものにエネルギーを与えます(創一・二)。「ことば」はすべてのものを顕現するものです(創一・三)。

『光が、やみの中から輝き出よ。』と言われた神は、私たちの心を照らし、キリストの御顔にある神の栄光を知る知識を輝かせてくださったのです」(Ⅱコリ四・六)。生ける神のことはであるイエス・キリスト(ヨハ

一・一、一四)は、「世の光」(ヨハ八・一二)であり、「神のうちには暗いところが少しもない」(Ⅰヨハ一・五)方なのです。

光が現われたとき、「神はその光とやみとを分けられた」。地球に関する限り、やみを完全には取り去らないで、光から区別しただけでした。さらに、「神は、この光を昼と名づけ、このやみを夜と名づけられた」(英直訳)のです。あたかも将来の解釈違いを見越したかのように、神は用語を注意深く定義されました。神が、「日」(ヘブル語ヨーム)ということばを用いられたまさにその初めの時に、神は「夜」と呼ばれる暗闇から区別するために日を「光」と定義されました。

昼と夜とを区別されてから、神はご自身の一日目の仕事を終えられました。「夕となり、また、朝となった。第一日である。」この同じ形式が六日の各々の終わりに用いられています。したがって、これらの日の各々の期間は第一日も含めて明らかに同じだったのです。さらに、「昼」は「光」の時で、そのとき、神は仕事をされました。やみは「夜」で、神が仕事をされなかった時でした。すなわち、各々の日の「夕」から「朝」にかけては、神は何もなされなかったのです。この決まり文句は、おそらく、文字通りに表現されているのでしょう。「こうして夕があり、朝があつた。第一日」などなど。第一日が始まると、それに引き続いて昼と夜、すなわち、光の期間とやみの期間がめぐってくるようになります。

このように、明・暗がめぐりくる取り合わせは、太陽がまだ造られていなかった(創一・一六)とはいえ地球は自転しており、地球の一つの側に太陽に相当する光の源が置かれていたことを明らかに意味しています。これらの日の長さは通常の太陽日の長さであったことも同じく明らかです。

旧約聖書の中にはヘブル語のヨームが「時代」を意味している所は全くないことに注意すべきです。そ

れは、通常「日」（二十四時間の意味）か、あるいは夜に対する昼の意味で二十四時間のうちの日の照っている時を指しているのです。時には、はっきり決っていない時（例・さばきの日）に用いられるかも知れませんが、初めと終わりが明らかな定まった期間を表わすのには決して用いられていません。さらに、文脈上明らかな時を指すことを意図しない場合以外には、あいまいな意味で用いられることもないのです。

一章で、各々の日の終わりに、「こうして夕があり、朝があった。第一（または第二）日」という決まり文句が書かれています。このように一つ一つの「日」には各々に明らかな境界があり、一連の六日の中の一日なのです。文字通りの日を示さないとすれば、このような判定基準は決して旧約聖書の記述には出てこないはずで、創世記の著者は、この記録から文字通りの日以外の考えを引き出すことのないように、いろいろな方法でガードしようとしていました。

実際、著者にとってこの点を明らかにしておくことは大切でした。なぜなら、古代の異教の人々はみな、原始の混沌とした状態から人や他の生物が発生して来る前に、悠久の時間を要したというある種の進化論的宇宙誕生説を信じていたからです。創世記の著者は「日」という用語を定義しただけでなく、日は文字通りの夕と朝で終わっていることを強調し、日とは通常経験している一日であったことをはっきりと示しました。どんなに細工しても、日という用語を地質時代とかそれに類する考えに当てはめる正當な道はないのです。

創造されたものとしての光の意味に戻ってみましょう。光は暗闇との対比で出て来ることから最初は明らかに可視光線を意味していたのです。可視光線の存在は、とりもなおさず全電磁波スペクトルが同時にあったことを意味します。可視光線だけでなく、一方に紫外線とその他のすべての波長の短い放射線が、他方には赤外線とその他の波長の長い電磁波がありました。

電磁波が実際に働き始めて、順次、物理的宇宙の活性化を完成しました。宇宙で相互に働くあらゆる種類の力とエネルギーは、電磁波と重力と核力だけで、これらすべての力が今や活性化されたのです。非常に単純化しているのは確かですが、この神の驚くべき創造の行為は次のようにまとめることができるでしょう。

物質の基本的形態を保つ核力は、神が空間、物質、時間の連続体である宇宙の構成要素を創造された時、父なる神によって活性化され、働きがなく形のない最初の物質に、聖霊が形と運動をもたらした時、重力は神の霊によって活性化され、暗闇から光を存在させるべく神が呼びだされた時、みことばによって、電磁波は活性化されたということです。もちろん、神は一つです。そして、これら神の三位格は、被造物のすべての部分に実際に加わり、こうして、創造された宇宙を保持するために働きつづけているのです。このすべては、創造の第一日に完成されました。物理的宇宙は創造され、エネルギーが付与されました。やがて自然界を支配する人間のために、さらに形態を整え必要とするものを供給する準備が整ったのです。

一章では述べられていませんが、創造の他の行為がこの最初の日に起こった可能性があります。地球の表に固い陸地ができ上がることに関連して、「地の基を定めた」（ヨブ三八・四〜七）時に、天使たちがいたので、創造の第三日の前のある時に大ぜいの天使たちが創造されました。物理的宇宙の創造前に天使たちが存在していた可能性はありません。天使たちの働きの場はこの宇宙であり、彼らの存在の実際の目的は、「救いを受け継ぐ人々」に仕えるため（ヘブル一・一四）だからです。天使たちは、「天の軍勢」と呼ばれ、天の存在する前に創造されることはあり得なかったはずです。

詩篇一〇四篇（二〜五節）は、天を幕のように張り、光を衣のようにまとわれた神のご臨在の下に地が形を表わした後で、しかも、地の基礎がしっかりと置かれる前に、天使たちは霊として造られたと述べています。

創世記のこの時点では、天使たちについてこのようには述べられていませんが、残りの創造の行為と形成における魅惑的観察者としての霊的存在が確かに推論されるのです。

詩篇一〇四篇(二―五節) 光を衣のようにまとい、天を幕のように張り、水の中にご自身の御座よりの光をおき、雲をいくさ車とし、風の翼の上を歩かれ、天使を霊に造り、御使いをもえるほのおとし、とこしえに取り除かない地の基を据えられた方。(欽定訳聖書の直訳)

住むべき幕屋

第一日の後、地球はもはや形のないものではなかったが、居住者のいない状態でした。次に、人の保護観察の期間に人が住むホームとして地を準備しなければなりません。最終的に、全宇宙は人の探索と使用に役立つように造られたはずでしたが、神は、試験的基地として人に地を与えなければなりません(詩一一五・二六)。そして、地球は人が住むのにまたとない適した惑星として準備されたに違いありません。

地球は、実に人の住みかとして適切で比べようのない惑星です。特に重要なのは酸素を持つ大気圏と液体の水を持つ水圏です。両者はともに人の生存にとって重要で、あらゆる証拠に基づいて調べた限りでは、両者はともに地球に独特のものです。神が地球を初めて創造された時の本質的なことは、注意深く大気圏と水圏を設計されたことです。「だが、手のひらで海(水)を量り、手の幅で天を推し量り、地のちりを枴に盛り、

山をてんびんで量り、丘をはかりで量ったのか。……主は地をおおう天蓋の上に住まわれる。地の住民はいなごのようだ。主は天を薄絹のように延べ、これを天幕のように広げて住まわれる」(イザ四〇・一二、二三)のです。

一章六―八節 神はまた言われた、「水の間におおぞらがあつて、水と水とを分けよ」。そのようになった。神はおおぞらを造つて、おおぞらの下の水とおおぞらの上の水とを分けられた。神はそのおおぞらを天と名づけられた。タとなり、また朝となった。第二日である。(協会訳)

創造の第一日、地球の外観はどこを見ても水のようにでした。すべての他の物質は水に溶解しているか、懸濁状になっていて、明らかに水から成っているような状態でした。この水の中の幾分かが他の大部分の水と分けられて、回転している地球のはるか上に移され、下の水との間に大きな空間ができました。下の水は、魚の生活や地の生命に必要な基本的な水の供給源として、上の水は、地上に住む生物の一種の防壁(住みかのテント)として、そして、これらの間の空間は生命維持に必要な空気の貯蔵庫として準備されたことでしょう。このようなものすごい分離を来すのに必要な力は、「大空よ。水の間にあれ」と神が仰せられたことばから来しました。

「大空」ということばはヘブル語のラキア(ragia)で「広がり」または「薄く引き伸ばしたもの」を意味します。これは現代の「宇宙空間」という学術用語と同じ意味のことばとみてよいでしょう。実際には「天」の意味で、すでに検討したのと同じ意味です。実際に、この節で「神は大空を天と呼ばれた」と特に言っています。

この宣言は「大空」と「天」は本質的に同じ用語で、両方とも「空間」を意味します。それが一般的空間をさすのか特定の空間をさすのかは前後関係によつて決まります。聖書には「天」についての特別な用語が三つ記されています。大気圏の天（エレ四・二五）、星のある天（イザ一三・一〇）、そして、神の御座の天（ヘブ九・二四）です。同様に大空という語もこれら三つと同じように（創一・一七、二〇、エゼ一・二二）用いられています。「天の天」という用語は、またしばしば用いられており（Ⅱ歴二・六）、おそらくすべての空間から成る全宇宙をさして言っているのでしょう。

この句で用いられている大空は、明らかに大気圏です。不幸にも多くの人々は、空を横ぎる固形の丸屋根であるかのように英訳しています。この結果、高等批評家たちは、科学以前の観点から創世記が書かれた証拠としてこの考えを用いて来ました。しかし、もともとのヘブル語でも、このことばが用いられている聖書のどこも、このような考えを示唆してはいません。「大空（Firmament）」はただ「うすく拡がった空間（thin stretched-out space）」です。それゆえ、この大空または大気圏で分けられた二つの水のかたまりは、地上に造られる生命をそれから維持する働きをする場としての基本的準備でした。実際の分離は、おそらく、神が熱エネルギーを液状の水の一部に当てて水蒸気に変えるという過程を通して行なわれたことでしょう。熱エネルギーは、水様懸濁液から大気的气体成分を分離するように働き、これが上にある水蒸気を支える「大空」となりました。

このように、「大空の上の水」はおそらく対流圏や成層圏の上で、現在、電離層として知られている高温帯に広大な水蒸気の層を形成し、さらに、宇宙へと広がって行ったことでしょう。聖書が上の水は「大空の上」にあったと述べているのですから、上の水は、現在、空中に浮かんでいる水滴から成る雲とは異なっていた

に違いありません。さらに、当時は「地上に雨」がなく（創二・五）、また「雲の中に虹」もなかった（創九・一三）のです。上の水が現在の水の循環の一役を担っている雲のようなものに過ぎないなら、雨も虹もともにあったはずですが。

地球を覆っていた洪水前の水の大蓋という考えは、古代または現代の多くの書物に出ています。多くの学者は水の大蓋を、地球のまわりの軌道を回っている水の粒子から成る、土星の輪のような輪状の系とみなしていました。他のある学者は、地球の周囲を軌道を描いて回る氷または液体の水から成る殻として書いています。ある人は、水の大蓋を、ただ地球を取り巻いている、おそらく、金星のまわりを覆っている雲と同じような厚い雲の堤のようなものと考えたのです。しかし、金星のまわりを覆っている雲は、今は水というよりも炭酸ガスから成っていると考えられています。

液体の水から成る天蓋と考えるよりは、水蒸気の大蓋と考える方がより妥当と思われるます。その理由は、第一に天蓋のでき方から推論して、もう一つは、天体が「地上に光を与え」また「しるしのため、季節のため、日のため、年のため」（創一・一四～一五）に役立ったためには、透明でなければならなかったはずだからです。水蒸気はいくら大量でも透明です。しかし、雲、霧などは小さな水滴から成り立っているので不透明です。

こうして、水蒸気の大蓋は、容易に空中に浮かんだ状態でとどまり、地上にある生命を維持するのに有効に働いたことでしょう。このような天蓋は次のような働きをしたと考えられます。例えば、

① 水蒸気は入ってくる太陽光線を通過させ、地球表面から反射する反射光を保持し拡散させる能力を持っていたので、地球全体を温室化するのに役立ったはずで、地上のどこでも一定の快適な暖かい温度を本質

的に維持したことでしよう。

② 地上の温度はほぼ一定であったので、大きな空気団の動きは妨げられ、暴風は知られていなかったことでしよう。

③ 地球上には大気の循環もなく、現在のような水の循環もなかった。そして、直接水面から蒸発したものを除いて、雨も降らなかったことでしよう。

④ 地球上には大気の循環もなく、したがって乱流もなく上空へ塵埃が吹き上げられることもなく、天蓋にある水蒸気は安定しており、自然に沈降することもなかったはずだ。

⑤ 地上は一定の温度であっただけでなく、毎日、夜と昼がめぐってきて、水分は局地的な蒸発と濃縮（霧や露のような）があるだけで、このため過ごしやすい一定の湿度を維持していたはずだ。

⑥ 地上いたる所に暖かい温度と快適な湿度が保たれていたため、不毛の砂漠も万年氷河もなく、世界中に青々とした植物が繁茂するのを助けたことでしよう。

⑦ 水蒸気为天蓋は、紫外線、宇宙線、その他の外宇宙から来る破壊的エネルギーを取り除くのに非常に役立つことでしよう。これらの放射線は、身体や遺伝子の突然変異の原因であり、突然変異は、個体または種の生存能力を弱めることが知られています。こうして、水蒸気为天蓋は人と動物の健康と長寿のために大いに貢献したことでしよう。

⑧ 厚い水蒸気为天蓋は、地表に及ぼす大気圧を著しく増すので、ある人々はこの考えに反対します。しかし、この大気圧の効果は問題をひき起こすというより、健康と長寿に非常によく貢献したことでしよう。このような「高気圧」は、一般に病気に對する抵抗力をつけ、健康を増進するのに非常に有効であることを、

最近の医学生物学的研究が次々と証明しています。高気圧下に生物が生活するには、もし、外部の気圧に應じて生物の体内圧力を調整するに要する時間が与えられれば、何ら問題になりません。

⑨ 神が後で洪水を引き起こす必要が生じた時、これら上の水は、大洪水を来たらせるための貯水槽になったことでしよう。この大洪水は、当時の全く望みのない腐敗しきった人々の中から、神に似た残りの者を救い出すために神が起こされたものです。今日の空中にある水蒸気は、もしすべてが沈降したとしても、地球を一インチの深さで覆うだけでしよう。

大空の上の水は濃縮され、降り注いでノアの洪水になったけれども、この水は千年期の地球で、また神が創造される新しい地球で、明らかに元の状態に戻るでしよう。詩篇一四八篇四、六節は、星のように「とこしえに」確立される「天の上にある水」について語っています。

一章九、一〇節 神はまた言われた、「天の下の水は一つ所に集まり、かわいた地が現れよ」。そのようになった。神はそのかわいた地を陸と名づけ、水の集まった所を海と名づけられた。神は見て、良しとされた。（協会訳）

「大空の下の水」は、一面の大海原で、その中に、おそらく、他のすべての物質を構成する諸元素が、ために溶解するか、宙に浮いた状態にあったことでしよう。創造の第三日に、神は分離の第三の業をなされました。第一日に光は暗やみから分離され、第二日に、大空の上の水は大空の下の水から分離され、そして、第三日に、かわいた陸地が下の水から分離されました。

ここでも、活力を与えたのは「かわいた地が現れよ」との神のことばでした。すさまじい化学変化が起こっていききました。溶解していた諸元素は沈澱し、他の元素と結合して巨大な鉱物の化合物や岩石を形成し、固形地球すなわち地殻やマントルや中心核を造りあげていったことでしょう。地殻に複雑な激変をもたらすように作用したエネルギーによる局地的例外はたくさんあったでしょうが、形成された物質は、一般に重いものは沈み、軽いものは浮かび、また多くの物質は宙に浮いた状態で、または溶解したまま、地殻が均衡を保つように配列されていきました。

地球には大きな動きが熱の差やその他の力に応じて起こっていききました。最後に水の上に固い地表が姿を現わしました。実に込み入った網目状の水路と貯水所が、盛り上がりつつある陸地から降下してくる水を受け入れるために地殻に生じました。これら貯蔵所のいくつかは、上から降下してくる水を直接受け入れるように開かれ、他は、地殻内に大きな地下空間として形成されました。これらすべては、複雑な網目構造をした導管や水路で相互に連絡していたので、本質的に水はすべて一つ所に集まっていたのです。

一つ「所」でしたが、水は多くの別々の窪地に集められていたので、神は「この水の集まった所を海（複数）」と呼びました。もちろん、これらは今日の海（複数）と同じではありません。なぜなら、洪水前の陸地と海の配置は、洪水の際に全く変えられてしまったからです。

最終的にこれら「地の基（複数）」（詩一〇二・二五、ヨブ三八・四、ゼカ一二・一、イザ四八・一三など）は完全に置かれました。そして、「神はかわいた所を地と名づけた」。この名（ヘブル語 *erec* エレッ）は一章一節と二節で用いられているのと同じことばです。そして、このことは、初めに創造された形のない物質と、最終的に固い地を構成するのに用いられた物質とは同じ物質であることを示しています。これらすべては、

創造の第三日の第一段階として完成されました。

一章一一～一三節 神はまた言われた、「地は青草と、種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ果樹とを地の上にはえさせよ」。そのようになった。地は青草と、種類にしたがって種をもつ草と、種類にしたがって種のある実を結ぶ木とをはえさせた。神は見て、良しとされた。タとなり、また朝となった。第三日である。

（協会訳）

岩石や鉱物が形成されただけでなく、豊富な化学肥料と湿気を持った砂、沈泥と、粘土大の粒子とが理想的に混ざり合った混合物である肥沃な土壌が一面を覆っていました。それから、神はまた言われました。今度は地球の諸元素を途方もなく大きな複雑な系に組織し、各々の系のその化学構造に他の単位を再生産（繁殖）できるような不思議な情報プログラムを持つものとしようと言われたのです。これらの系が「生きて」いたこと、少なくとも何ものかを感じ取る感覚を持っていたとは暗示されていません。ただ各々は、その中に「種を持つ」ており、したがって、その種類を再生産（繁殖）する力を持っていたのです。（訳者注・情報プログラムをもつ分子はDNAのことで遺伝子の本体と考えられる。）

主な植物の三つの目（もく＝分類単位）——青草と種を持つ草と実を結ぶ果樹——が記されています。この分類が、現代の分類学の命名法に当てはまるか否かを問うのは的はずれです。聖書の分類は明白で自然であるのに対し、現代の分類学の命名法は、人が作ったもので全く独断的なものです。この三つの分類は、植物のすべての種類をカバーしようとしており、最も包括的でわかりやすい分類です。「青草」という用語は、地表

を覆って広がっているすべての植物を含み、「種のある草」は、すべての灌木ややぶを含み、「樹木」は、すべての大きな木性樹木、すべての実をみのらせる木を含みます。

これらの植物が、種（たね）としてではなく、その中に種を持つ完全に成長した植物として造られたのは大切です。こうして造られたこれらの植物は、それ自体、ある程度年数を経ているように見えたことでしょう。もちろん、「外見上、年齢を経たもの」として創造されたと考えても、神がごまかしをしたことを示唆するのではなく、真の創造に必要で、それに当然伴う出来事だったのです。創造の週に作用した過程は、現在起こっている過程ではなく、「創造と制作」の過程であり、現在の過程とは全く違います。アダムは完全に成長した人として創造されたし、樹木は完全に成長した樹木として創造されました。そして、全宇宙は、機能し得る実体として造られたのであり、まさに初めから完全かつ十分に発達したものであったのです。現在の過程を前提として計算する「外見上の年齢」は、創造者によって示された「真の年齢」とは、大いに異なっていたことは確かでしょう。

一一節で「種（たね）と種類」の両方について初めて述べられています。創造された生き物に組み込まれていたのは、それと同じ種類の生物を再生産しつづけられるようにプログラムされた「種（たね）」でした。種（たね）の中に含まれているいわゆるDNA分子や遺伝暗号が非常に複雑であるという最近の理解は、種類の安定性についての聖書の教えを補強してくれます。生物の各々の種類は、独自のDNA構造を持ち、それと全く同じ種類の生物だけが再生産され得るのです。各々の生物は同じ種類内でも変異の可能性はものすごく大きいものです。これが一つ一つの個体の発生と種内での多くの変異を起りやすくしていますが、新しい別の種類へと進化するのを妨げているのです。同じ種内での多数の「水平的」変異は容易に起こりますが、

別な種への「垂直的」変異は起こりません。

「種類に従って」という句が、一章に十回も出ていることは大切です。「種（ヘブル語 min ミン）」という用語が正確に意味することは、変異に限界があるということです。各々の生物は各々自分の種類にしたがって繁殖するので、他の種類の子を生ずることはあり得ないということです。この「種」が、近代のリンネの分類体系のどの用語に相当するかは、将来の研究によって決定されるべき事柄です。結局、ミンはしばしば「種」、あるときは「属」、まれには「科」と同じ意味で用いられたことがわかります。実際に生物の同族外への変異の可能性は決してありません。いずれにせよ、すべての生物が共通の祖先、または血統に関係づけられるという進化論教義の誤りは、今日までなされ実証された科学上の観察のすべてによってだけでなく、これら聖書の記述によっても証明されているのです。

創造された種の不変性は、さらにコリント人への手紙第一、一五章三八、三九節で支持されています。「神はみこころのままに、これにからだを与え、その一つ一つの種にそれぞれのからだをお与えになる。すべての肉が、同じ肉なのではない。人の肉があり、獣の肉があり、鳥の肉があり、魚の肉がある。」動物に当てはめられた「種類」という用語の補足的説明が、レビ記一章一三―三三節に少なくともいくらかなされています。

果樹のように複雑な形態の植物の形成でさえ、動物がまだ何一つ造られないうちに起こったと述べられています。もちろん、このことは実に論理的ですが、無脊椎動物であれ脊椎動物であれ、海生動物は果樹やその他の高等植物の進化する何億年も前に進化していたという進化論で受け入れられている理論体系とははっきり矛盾します。さらに、多くの植物は昆虫の介入による受粉が必要ですが、昆虫は創造の第六日まで造られませんでした。この事実、創造の日々が長い時代であった可能性に反対する論拠となります。有神進化の

考えは、実際に聖書の創造の記事の各々の節に矛盾するのです。

それに、「神は見て、それをよしとされた」という句が三回あります。四節の地上に光をもたらすわざの後と、一〇節で地表を水の集まった所とそうでない所に分け、かわいた地ができた後と、一二節での植物が芽生え地の面を覆った後にこのように宣言されました。

「夕となり、また朝となった。第三日である。」夕（ヘブル語 *ereb* エレブ）という用語と、朝（ヘブル語 *boger* ボケル）という用語は、旧約聖書にそれぞれ百回以上出てきます。そして、それは文字通りの意味です。すなわち、それぞれ日の明るい間の終わり、日の暗い間の終わりを意味しているのです。同様に、第三日のように数詞を伴って日が用いられているのは、モーセの五書だけで百回以上あり、常に文字通りの意味を指して用いられています。陸地と海とすべての植物が文字通りの一日で形成されたと想像するのは、私たちの思いに挑戦するかも知れませんが、聖書が言っているのは、まさにこのことです！ 神はこんなことをする力があるのだろうか、神がなされたと告げられるに当たって、神は真実を告げられたのだろうか、などと問うのは共に正しくないことです。

一章一四〜一九節 神はまた言われた、「天のおおぞらに光があつて昼と夜とを分け、しるしのため、季節のため、日のため、年のためになり、天のおおぞらにあつて地を照らす光となれ」。そのようになった。神は二つの大きな光を造り、大きい光に昼をつかさどらせ、小さい光に夜をつかさどらせ、また星を造られた。神はこれらを天のおおぞらに置いて地を照らせ、昼と夜とをつかさどらせ、光とやみを分けさせられた。神は見て、よしとされた。夕となり、また朝となった。第四日である。（協会訳）

創造の第一日に、神はご自身の活動と目的の無限の領域である全宇宙を創造し、エネルギーを与えました。第二日に、地球に原始の水圏と大気圏を造られました。第三日に、地球に地殻と植物圏を造られました。最後に第四日に、地球をとりまいて照らす星や惑星からなる天体すなわち星団を完成されました。

第一日に、「光よ（ヘブル語で *or* オール）。あれ」と言われ、第四日に、「光る物（ヘブル語 *maor* マオール）となれ」と言われました。まず、本質的な光を、その後で光の発生源というのが論理的で聖書の順序です。

最初の三日間の光と、その後地上を照らした発光源の主な目的は「光とやみを分ける（創一・四、一八）」ため、光を与えるこの二つの体制は本質的に同じであつたことを意味しているだけです。昼と夜の長さも、両者共に同じで、宇宙から地上に光が来る方向も各々同じであつたに違いありません。

ことばを換えて言えば、第四日に据えられた天体から発するはずの光線と同じ強さで同じ方向からの光が地球のまわりを回転しているかのように最初の三日間地上に降り注いでいたのです。太陽も月もまだ造られていませんでしたが、光は、あたかも日中は太陽から、夜は月や星から来るように地上に降り注いでいました。こう考えるのがおかしいと思われるなら、神にとって光の波を造るのと、光の波を発生させる機械を造るのと、どちらがやさしいかを考えてみてください。これは同じことです。

人を創造された後、「しるし、日、年、季節」という機能を付加して人の生活に役立たせる以外に、このような光の発生源を造る必要はありませんでした。それゆえ、十億光年の距離にある星が造られてから、光が地球に到達するのに十億年はいくらもなかったのです。天体が創造される三日も前に、星からの光線が地上まで暫定的に到達している状態で造られたのです。すでに述べたように、宇宙は初めから「成長しきった」状

態で創造されました。それゆえ、神は意図した目的に役立つ状態に宇宙を整えあげるのに何百万年もの年月を必要とはしなかったのです。天体の目的は「地上を照らす」ことでした。したがって天体が地上を照らしたのはまさに造られた最初の時からでした。

ある人々は、進化論で想定しているような変化が星に起こっていると考えて、このような考えに反対します。しかし、このような変化が実際に星に起こっているのを観察した人はただのひとりもないのです。人が天体を観察した範囲では、地球の自転、公転と回転軸のぐらつきによる天体の方向の変化は別として、現在運行しているのと同じように常に見えたのです。しかし、常に同じでないことを示す例として、星が熱せられたり爆発した時に、たまたま天に観察される新星や超新星をあげることができるかも知れません。しかも、これらの幾つかは地球から数十万光年にあると考えられている銀河の中で観察されています。それゆえ、新星や超新星を生ずるような出来事が天体に起こったのはそれに応じて数十万年前に違いないというのが彼らの論拠です。

これは小さな問題かも知れませんが、いくつかの答えが可能です。一般に引き合いに出されている途方もない星間距離は、非常に難解で疑わしい多くの仮定事項に基づいて得られているにすぎないのです。このように、天文学的な距離を測定できる幾何学的方法は、どんなに大目に見ても三三〇光年位に過ぎず、したがって、これ以上の距離に関しては正確な値を得ることはできないのです。さらに、このように途方もない距離の全域にわたって光の速度が一定であるという保証もありません。例えば、無限の距離からわずか二、三年で光が地球に到達するような光の運動に関する相対論や、空間のひずみに関するりっぱなモデルがあります。結局、神の御意志であれば、初めに空間を横切って創造された電磁波の光束のいくつかに脈動を創造されな

かったとする理由はありません。このような「脈動」が地球に到達したとき、いろいろな関連した光跡にエネルギーが突然急に増強されるように創造されただけでも、いわば新星として解釈されることでしょう。

神がこのようなことをなさった理由は、まだ定かではありませんが、これを否定する証拠もありません。おそらく、神には私たちが理解できない幾つかの理由があったことでしょう。私たちの無知が、神の目的を疑ってよい理由にはなりません。いずれにしても、これらの遠くにある新星と比較的新しい宇宙の創造を明確に調和させ得ないからと言って、近い年代に創造されたとする聖書の明確な証言を除外することはできないのです。

光は「天の天空」にありましたが、第二日に形づくられた「天空」（六〜八節）と同じではありませんでした。これは鳥が飛べる（二〇節）「天の天空」でした。上述の通り、「天空」という用語は、前後関係で規定されているようにどの特定の空間にあてはめてもよいのです。八節には「神はそこのおおぞらを天と名づけられた」と記されています。明らかに「天空」は一般的用語で、「天」は神が創造された天空（または空間）のうち、特別の目的を持った活動の場に対する呼び名です。太陽も月も「地を照らす光の源」と呼ばれてはいませんが、両者が同じ物質から成っていることを指しているではありません。太陽は実際に光を発生していますが、月は光を反射しているにすぎません。しかし、地球に対する働きに関する限り両者共に「地を照らす」もののなのです。

その他の星が、太陽や月に比べて重要性の劣るものとして取り扱われているのは興味深いことです。「神はまた星を造られた。」たとえば、星が地球に比べて比較にならないほど大きいとしても、また、それらの星の多くが太陽よりはるかに大きいとしても、これらは地球よりもずっと単純な構造です。ある星は、ほとんど水

素とヘリウムから成り、本質的に全く単純です。それに比べ、地球の構造は、生物が生存し得るようにデザインされており、非常に複雑かつ完全に独特なものです。複雑性と構成は、単なる大きさよりも、もっと意味深長な重要性の尺度です。神の天体創造の単純な記録と、星や銀河の進化に関する最近のいろいろな学説とを互いに関連づける必要はありません。これらの学説はすべて興味深い臆測に過ぎず、その一つさえ一般に受け入れられているものはないし、どの学説も重大な反論にぶつかっていることに留意するだけで十分です。一方、星が現在ある通りに造られたことを信じ得ない理由は、「自然に生じたという偏見」以外に全くありません。しかも、今までだれも星や銀河の進化や変化を直接観察した人はいないのです。

天体は、日や年と同様に「季節」のために用いられるというのですから、一年の間に明瞭な季節があるのは当然で、このことは、創造されたときすでに現在と同様に地軸は公転軸に対し傾斜していたことを意味します。水蒸気为天蓋はどこをも暖かい気候に保ちましたが、それでもなお、季節によってわずかながら温度の変化はあったはずで、星が「しるしのため」に用いられることの意味は何かはつきりしません。そのため多くの示唆が与えられましたが、もっとも無理のない解釈は、種々の星のグループに関係しているということです。これら星のグループは、日や年の進み具合を肉眼で容易に認めるために、また、さらに拡大して神の創造における目的の進展段階を知るしるしとして役立ちます。たとえそうであったとしても、これらの黄道帯の「しるし」は、まもなく異教的占星術へと墮落して行きました。

「そのようになった」という句は、一章の六日間の中に六回も出てきます(七、九、一一、一五、二四、三〇節)。この記述は、神が言われたことがそのように成就されたことを強調しているのです。「神は言われた」という句は十回出てきます(三、六、九、一一、一四、二〇、二四、二六、二八、二九節)。このうち最初の七つは創造に関

する命令が続いており、「……あれ」という強調語が始まっています。最終的に創造の第四日の働きは、「神は見えて、良しとされた」という断定的なことばで結ばれています。このことは、天体の完成時には、軌道はずれたり、衝突したり、どんな面においても大変動を示しつつあるような星・惑星・衛星などはなく、すべての天体が素晴らしい安定した状態にあったことを示しているのです。

生きている被造物

第二日に大気圏と水圏を、第三日に岩石圏と生圏(バイオスフェア)を造られました。引きつづいて第五日に大気圏と水圏に生きる動物の生命を、第六日には岩石圏と生圏に生きる動物の生命を造られました。この時までには、生きている被造物にとって必要な物、すなわち、光・空気・水・土・化学物質・植物・果実などはすべて整っていました。しかし、足りないものが一つありました。地球には住むべきものが何もなくかつたのです。しかし、神は「地球を人の住みかに造られ」(イザ四五・八)たのです。そして、第五日と第六日を創造の最後のわざに当てられました。

一章二〇～二三節 神はまた言われた、「水は生き物の群れで満ち、鳥は地の上・天のおおそらを飛べ」。神は海の大なる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを、種類にしたがって創造し、また翼のあるすべて

の鳥を、種類にしたがって創造された。神は見て、良しとされた。神はこれらを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、海の水に満ちよ、また鳥は地にふえよ」。タとなり、また朝となった。第五日である。（協会訳）

動物の生命の始まりは、進化論者が考えているような、原始の海洋上で火花放電に対応してたまたま生じたもうい原形質のかたまりのようなものではありません。むしろ、水は、突然、実に、おびただしい生き物の群れで満たされたのでした（文語訳で誤訳されているように、水に生き物が「生じ」たのではない）。

欽定訳聖書で「動く生き物」と訳されているヘブル語シェレッツ（sharrets）は、実際には十箇所であらう（このうち二箇所は誤訳されています）。一章二四節などで「動く」と訳されているレメス（remes）と本質的には同じ意味のことばです。しかし、一章二〇節に用いられているように、結局、無脊椎動物・脊椎動物・爬虫類を含むすべての海生動物を指しています。この節で「生き物」（ヘブル語ネフェシュ nephesh）ということばが初めて出てきます。実際は、これは「魂」と訳されることがあります。そして、しばしば人の魂と動物の生命に用いられています。聖書の意味では、植物は、真の生命または魂（あるいは意識）を持っていませんが、動物と人は共に持っているのです。

水圏の動物と共に、大気圏の動物、文字通りには、「天の大空の面」を飛ぶ鳥が現われました。欽定訳聖書で「open」と訳されているヘブル語ペネイ（pene）は「……のおもて」を意味しています。このように「天の大空」と二〇節で言われている句は、対流圏（大気の低い部分）と成層圏（対流圏の上の大気層）の両者に当てはまると考えるのが合理的です。鳥は、大空のおもて、すなわち大空の低い所だけを飛びます。

動物は、植物が地や水から生じたように、単に「生じた」（文語訳）ではなかったのです。意識の原理は基本的物質の複雑な組み合わせだけででき上がるものではありません。したがって、新しい創造が必要でした。神は第一日に宇宙の物質の諸元素を創造されました。そして、ここでも真の創造の第二の行為をなされました。

「神は海の大なる獣と、水に群がるすべての動く生き物とを……創造された。」

「生き物」は「生きている魂」と同じです。したがって、この創造の行為は、意識ある生命の実体の創造として理解することができます。したがって、意識ある生命はヒトを含めてすべての動物の不可欠の部分なのです。この創造の行為の産物として第一に述べられている動物は、特に、「巨（おお）いなる魚」（文語訳）、または「海の巨獣」（協会訳、新改訳）で、多くの翻訳者たちはヘブル語タニン Tannin をこのように訳しています。しかし、この同じことばは、「竜」と訳されている場合が最も多いことは大切です。明らかに、このことばは、今は絶滅してしまっている過去の巨獣や、すべての大きな海生生物を総括したことばです。多くの古代の民族の記録や伝承にあるように、聖書にも竜についてしばしば述べられています。これを単なる童話として軽んずることはできません。おそらく、これらの記録や伝承は、恐竜が絶滅する前に彼らに出会った部族の祖先たちが伝えた恐竜の記憶を意味しているのでしょう。

この箇所で言っている動物の種類は、おそらく、水と空に住むすべての生物を含める意図だったことでしょう。さらに、各々の動物は、種類に従って再生産されるはずでした。すべての種類の植物と同様に、動物の生化学的生殖系は、実際に、種の不変性を保証するために仕組みられたものでした。物理的にまたは化学的に見ると、動物は植物に似ています。最近の遺伝学は、複製するためのすべてのしくみは、DNA分子の中にプ

ログラムされているすばらしい情報のの枠組みの中で作用することを示しています。各種属のDNAは種内の変異をかなりの範囲で許容するようにプログラムされていますが、種自体の枠を越えて変異することを許容することはありません。

この場合、神は、御自分のわざがはなだ良かったと宣言されたばかりでなく、創造された動物の上に祝福を宣言されました。人類のように神の愛の対象ではなかったけれども、動物は神の庇護と顧みの対象でした。神の許しなしには、一羽のスズメさえ地に落ちることはありません（マタ一〇・二九）。また、神は絶えず彼らを養ってくださいます（マタ六・二六）。祝福のことばに、神は、創造された動物が絶えず増え広がるようにとの命令と準備の両方を組み込みました。こうして、動物が間もなく世界のあらゆる所にいるようになるはずでした。同様の命令がノアの洪水の後、箱舟から出て来た動物たちに与えられたのはおもしろいことです（創八・二七）。また、一章に記されている創造の順序と、正統的進化論で教えている順序では異なるのは明らかです。進化の学説は海生生物が最初に発生し、ついで陸生植物、その後、鳥の順に進化したと述べています。ここでは、陸生植物が最初に出現し、その後、海生生物と鳥が同時に出てきたと述べています。さらに、どちらかと言えば、最も大きな海の動物が初めて、これはまた進化の学説に反します。

一章二四・二五節 神はまた言われた、「地は生き物を種類にしたがっていだせ。家畜と、這うものと、地の獣とを種類にしたがっていだせ」。そのようになった。神は地の獣を種類にしたがい、家畜を種類にしたがい、また地に這うすべての物を種類にしたがって造られた。神は見て、良しとされた。（協会訳）

第五日に動物の生命を創造し、それを空と水に分けて住ませた後、神がみわざをなさる日はただ一日残されていただけでした。地のおもて（岩石圏と生圏）に住む動物を造る必要がありました。

神は空と水の動物を創造した（ヘブル語パーラー、二二節）と言われているのに、これら陸の動物は造られた（ヘブル語アーサー、一五節）と記録されているのは大切です。どちらかと言えば、陸生動物は他の動物より高等で、したがって、神の活動範囲は、空や水の動物より高度の部類であつたはずで

このように確かに明らかなことばの使い分けがある理由は、二二節での創造の行為が、単に海や空の生物の創造ではなく「すべての生ける魂」の創造であつたということにあります。「魂」の原理は、第五日に創造されたので、第六日にはそのことについて再び述べる必要はなかったのです。陸の生物の形成は肉体の構成要素と、魂（ネフェシユ）を含めすでに存在していた素材の新しい種類への編成にすぎなかったのです。そのことでは、海生動物を造ることや植物を造ることと、実際に陸生動物を造ることでは、本質的差はありませんでした。すべての生物は、同じ基本的化学構造と生殖のしくみを持っていました。

第六日の前半に造られた地の動物は「家畜、這う物、地の獣」としてまとめられています。この記事は、陸の生物に関して総括的に取り扱おうとしているのでしょう。多分、「家畜」とは飼育できる動物を指し、「地の獣」は大きな野生動物を指し、「這う物」とは地のおもてに接して這ったりのろろ歩くすべての動物に対する用語でしょう。この分類は、人が作った分類（両生類・爬虫類・哺乳類・昆虫など）の系とは関係なく、動物に対する人の興味に基づくもっと自然な分類方法です。このように「地の獣」という語は、ライオンや象のような大きな哺乳類ばかりでなく、おそらく、恐竜として知られている絶滅した大きな爬虫類をも含んでいたことでしょう。「這う物」は、昆虫や小さな爬虫類と、おそらく、多くの両生類や多くの小さな哺乳類

(例えば、モグラ、ネズミ。レビ二・二九～三二參六照)をも指していたことでしょう。

二四節と二五節で各々のリストが明らかに入れ替わっていることからわかるように、これら地の動物の三つの部門は、同時に造られました。さらに、推測されている昆虫から両生類、ついで爬虫類、最後にすべての哺乳類という進化論的順序とは何ら関係がないのも明らかです。事実、進化論では、鳥類の前に昆虫、両生類、陸性爬虫類などすべてが出現したとしています。しかし、創世記は鳥類はこれらの生物出現の前の日に造られたと述べています。また「神は見て、良しとされた」とあるように、これらの動物間には進化論的生存競争もありませんでした。また、神は各々の部門を「種類にしたがって」造られたので、ある種が他の種に進化することもあり得なかったのです。

これらすべての動物は、地または陸から「生ぜよ」と言われました。すなわち、これらの身体は地球と同じ元素から成り立っていました。したがって、彼らが死ぬと、地のちりに帰ります。また、彼らは「生きている生物」(またもやネフェシユ)と言われているので、彼らはみな「魂」を持っていました。この点で、彼らはみな空や水の動物(創一・二二)と似ており、また、ヒト(創二・七)にも似ておりました。

完成された創造のみわざ

今や地球は、その支配者となるはずの人間の住みかとして、十分に整えられました。有神進化論者が考え

ているように、ヒトの住みかの準備に神は五十億年も必要とはせず、そのために費やされた六日間すら、実際には必要としなかったのです。六日間を使った理由は、まず第一に、創造された別々の構成成分間にある秩序正しい論理的関連を強調し、第二に、人が一週に六日働くことの手本を示すためにあったようです。規則正しい休みの日と神との特別な交わりは、人の幸福のためには不可欠であり、したがって、神の示された実例は最上の手本で、また、このような日を守ることは、人にとって励みとなるはずでした。

実際、陸生動物の形成には第六日のほんのわずかしかなかったに違いありません。二章では、一章で簡略に記されている第六日に起こった残りの出来事を、より詳しく記述しています。

一章二六～二七節 神はまた言われた、「われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造り、これに海の魚と、空の鳥と、家畜と、地のすべての獣と、地のすべての這うものとを治めさせよう」。神は自分のかたちに人を創造された。すなわち、神のかたちに創造し、男と女とに創造された。(協会訳)

最も心をひきつけることが、この区分の最初の節に表わされています。今までの神の行為は、「神が言われた。……があるように」ということばに続いてすぐ起こりました。この節の場合、神はあたかも独りごとを言っているように「神はまた言われた。われわれのかたちに、われわれにかたどって人を造ろう」と語っておられます。

神は天使に語っておられたわけではありません。なぜなら、ヒトは天使にかたどってではなく、神にかたどって造られようとしていたのです。したがって、神は独りごとを語るほかはありませんでした。すなわち、唯

一で複数の神の一位格が、他の位格に話し掛けておられたのです。

神の三位格がお互いに話し合いをしておられる興味深い実例が、旧約聖書の他の多くの所に見うけられます（例えば、詩二・七、四五・七、一一〇・一、イザ四八・一六）。同様に新約聖書でも、イエスが人としてお生まれになる前のキリストと父なる神との間のこのような交わりは、マタイの福音書二一章二七節、ヨハネの福音書八章四二節、一七章二四節、その他に記されています。

ヒトに焦点を合わせた神の会議は、「（時の以前）」ということがどのような概念をもつていようと（時の始まるずっと前にまず持たれました。この会議で、小羊は世の基の置かれる前に殺されるべく決定され、そして、贖われる人の名は天地の造られる前から「生命の書」に記され、さらに、神は天地の始まる前から恵みによって救われるはずの人々をお召しになりました（Ⅰペテ一・二〇、黙一七・八、Ⅱテモ一・九）。

この第六日に、これに類する他の会議が行なわれ、昔からの計画は今や正式に宣言され、記録され、実行に移されました。すべての生き物のうちで最も高等で複雑な生き物は神によって造られ、それ以外のすべて、すなわち陸海空のすべての動物に対して支配権が与えられるはずでした。ヒトの身体は、動物の身体が造られたのと同じ方法で造られました（創一・二四、二・七）。ヒトは動物と同様に生命の息を持っていました（創二・七、七・二二）。また、動物のように「生ける魂」（創一・二四、二・七）を持ってさえたのです。

こういうわけで、ヒトの構造は、肉体と精神面で共に、動物の構造よりはるかに複雑だったはずですが、基本的にそれは全く同じだったのです。それで、「神は、人をわれわれのかたちに造ろう（ヘブル語アーサー）」と提案されたのです。

それでも、ヒトは非常に複雑で、高度に組織化された単なる動物以上の存在であるべきでした。ヒトは、ただ量的に偉大であるばかりでなく、質的にも独特で、どんな動物も持っていない何か大切なものを持っているはずでした。ヒトは神御自身のかたち、また神に似たものであるはずでした。したがって、またヒトは神のかたちにかたどって創造（パーラー）されました。ヒトは神のかたちにかたどって形成され、また、創造されたのです。

このことを十分に理解することはできませんが、深遠で神秘的な真理です。したがって、その意味について多くの異なる意見があるのは当然です。ヒトは魂だけでなく霊も与えられたというだけでは十分ではありません。これらの用語がもっと明確に規定されなければなりません。旧約聖書で霊ということばはヘブル語でルアハ ruachで、通常、「風」とか「息」とも訳されます。このように、「生命の息」（または文字通りには「生命の霊」）は、ヒトだけでなく動物も持っています。しかしながら、もしこの用語を「神のかたちに似せて」、すなわち、永遠の霊・芸術的・道徳的・霊的属性を持った神に似たヒトの性質を特徴づけるものとするなら、少なくとも、ある面では適当な陳述と言つてよいでしょう。天使や悪魔の霊と神の霊に似たヒトの霊は永遠の霊です。一方、その肉体が死ぬ時、動物の霊は存在を止め、地に帰ります（伝三・二一）。

いずれにしても、動物には分け与えられないでヒトにのみ与えられたこれらの特性——道徳的良心、抽象的に物事を考える能力、美や感情の理解、中でも神を礼拝し、神を愛する力は神のかたちに創造されたヒトに伴わなければならない性質であったことは確かです。ヒトに備わっているこの永遠性と神性は、神に似せてということばが指し示している本質であったに違いありません。これらのどの性質も、動物の一部である魂（ネフェシユ）にはないものですから、新しい創造が必要でした。

しかし、これでその意を十分に言い尽くしているわけではありません。ヒトは神のかたちにかたどって造

られた事実をも私たちは同じく取り扱わなければなりません。「造られた」というヒトの局面は肉体と魂についてでした。したがって、ある意味で、ヒトの肉体でさえ、動物と同じではなく、神のかたちなのです。

しかし、全知の神は、物質ではなく霊です(ヨハ四・二四)。それでは、どうしたらヒトの身体を神のかたちに造られるのでしょうか。

神は肉体をお持ちになりませんが、神が肉体なしでなしうる働きをヒトができるようにその身体をデザインし形造られたとだけ言っておきます。神は実際の眼・耳・鼻・手や口を持っていてもいなくても、見(創一六・二三)、聞き(詩九四・九)、嗅ぎ(創八・二二)、触れ(創三二・三三)そして、話す(Ⅱペテ一・一八)ことができます。さらに、神は人に見える形をとって現われる時は(創一八・一二)、いつでもヒトの身体の状態をとって現われました。そして天使の場合も同じです(使一・一〇)。それゆえ、ヒトの身体には、神が御自身を現わすのに適切な、他に類を見ない重大な何ものかがあるのです。そして、神はこのことを心に留めてヒトの身体をデザインされたに違いありません。なぜなら、神は世の始まりから御自身の働きをすべて御存じだったからです(使一五・一八)。したがって、神はヒトを動物に似せてではなく、直立した姿勢で仰ぎ見る顔、感情に応じて表情を表わし得、そして、理路整然とした象徴的な話のできる脳と舌を持つようにデザインしました。

もちろん、神は時が満ちてヒトになられることを知っておられました。その時には、神は御自身の独り子のために身体を準備されました(ヘブ一〇・五、ルカ一・三五)。そして、ヒトが神に似せて造られたように、やがて独り子のお身体も「ヒトに似せて造られる」時が来ます(ペリニ・七)。

さらに、キリストは肉体と霊において、神のかたち(ヘブ一・三、コロ一・一五、Ⅱコリ四・四)でした。神は、

いつの日か御自身がおとりになる肉体に似せてヒトをお造りになったと推測することは行き過ぎでしょうか。少なくとも、この意味で、肉体的にも精神的にもヒトは神の子にかたどって造られ、同時に神の子に似せて創造されました。

「われわれのかたちに人を造ろう」との宣言も合わせ、神が御自身のかたちにヒトを創造されたと三回も述べられているのは重大です。また、単数と複数の両方を用いて神について語っているのは適切です。なぜなら神は一体であるが一位格以上でもあるからです。神が三位一体であることは、一章一節と共にここでの三重の宣言に暗示されています。こういう意味で、ヒトもまた身体・魂・霊の三位一体です。

「ヒト」ということは、実際はアダムで、「地」(ヘブル語アダマ・adamah)に関係があるのです。なぜなら、ヒトの身体は地の諸元素から造られたからです(創二・七)。ヒトはすべての動物を支配するだけでなく、ヒトが造られた地(創一・二六)をも支配すべきであることも心にとめておくべきでしょう。

最後に、男と女を含めて「ヒト」は包括的な用語であることは明らかです。男と女は共に神のかたちに創造されました。男女の肉体形成の詳細は二章に記されています。こうして、男女共に創造者と個人的な交わりができるように、永遠の霊を等しく持っているのです。

一章二八・三〇節 神は彼らを祝福して言われた、「生めよ、ふえよ、地に満ちよ、地を従わせよ。また海の魚と、空の鳥と、地に動くすべての生き物とを治めよ」。神はまた言われた、「わたしは全地のおもてにある種をもつすべての草と、種のある実を結ぶすべての木とをあなたに与える。これはあなたがたの食物となるであろう。また地のすべての獣、空のすべての鳥、地を這うすべてのもの、すなわち命のあるものには、

食物としてすべての青草を与える」。そのようになった。(協会訳)

神は男と女とに創造して、彼らに祝福を宣言され、基本的教訓と任務を与えられた。神が動物種の各々を一組以上創造されたかどうかは述べられていませんが、「群がる」、「豊富に」などのような語句が用いられている点から表面的に推論すると、種類ごとに多くの組(対)が造られた可能性があります。いずれにしても、アダムとエバの形成の詳細が書かれている二章で明らかにされている事実は、一人の男と一人の女が造られたということです。

この最初の人に与えられた最初の命令は「生めよ。ふえよ。地を満たせ」ということでした。欽定訳聖書は「replenish (満たす)」という用語を用いています。古代英語でも原語のヘブル語でも、再び満たすという考えを示唆しているものではありません。ヘブル語はマール (male) で、単に「満たす (fill)」、「達成する (fulfill)」、または「満たされる (be filled)」を意味します。マールは三百回以上も用いられていますが、欽定訳では七回だけ replenish と訳されています。そして、これらは「fill (満たす)」と訳してもよいのです。多くの人が主張しているように、この一節をとって、間隙説の証拠資料として用いるのは確かに間違っているのです。

しかし、現在、人は神の命令通りに満ちてはいません。それにもかかわらず、今日、多くの人々は不当にも、人口増加の警告を受け、政府は人口増加を引き下げているいろいろな対策を立てるように迫られています。洪水後、付随的に繰り返し与えられた神の命令(創九・一)によって、地球が大人口を支える能力のあることを十分に知り得るようにされており、その命令は今もなお廃止されていないことは確かです。現在の人間の科学的知

識をもつてしてさえ、地球は現在より多くの人口を支え得ることがわかるのです。明らかに際限なく増えつづけることはできませんが、神は疑いもなく、このような不幸な結末に対して適切な準備をしておられます。一例を挙げると、聖書は人が地球を完全に滅ぼす前にキリストが再び来られると約束しています。人間的に言えば、この予想は人口増加よりもっと差し迫った危険とされます。さらに動物の個体数の研究で明らかに二、三の証拠があります。特定のグループの動物が生態的住みかで最適の数に到達すると個体数は安定します。それは生存競争ではなく、成員の生殖能力を幾らか減ずる心理的・生理的しくみによるのです。神は人の人口問題にも同じような方法をとることができるはずです。

もし、人がエデンの園で試みに失敗しなかったなら、結局、人口が増えるにつれて、他の惑星に移住するよう許可された可能性もあります。このような考えは単なる想像に過ぎません。なぜなら、この滅び行く地球においてさえ人口はまだ最適の水準に達していないからです。

生殖は、一夫一婦制の結婚の枠組み内でなされるべきであることを二章で明らかにしています。この生殖の命令に加えて、神は、地を従わせよ、地に動くすべての生き物を支配せよ、と命令しました。これらは、まず征服し、支配するという軍隊用語です。しかし、前後関係から本当の闘争はなかったと思われます。なぜなら、神がお造りになったすべては「良かった」と宣言されているからです。だれかがこの命令を、「文化命令」と呼んでいるように、まず第一に、錯綜した過程と複雑な系をもった地球についての強力な研究と、次にこの知識を地上の居住者である動物と人類のために用いるという含みをもった意味深長なことばであることは明らかです。ここに、地球に対する人類の基本的企画において、科学と技術を権威づける人類に対する太占の委任状があるのです。

「科学」は人間を訓練する学問で、世界に生起する現象を理解させるものです。「技術」は、地上のすべての居住者にとつて、居住条件をさらによくするための地球の有効な秩序と発展に寄与する知識の実践であり、手段です。これは、工業・農業・医学・その他多くの実践工学などを含み、人類に役立つ分野を指します。従わせ、支配せよ（征服し治めよ）という二重の命令は、人間の生産的活動のすべての範囲にわたります。科学と技術、調査と発展、学説と応用、研究と実践等はこれら二つの考えを表現するいろいろな方法です。

したがって、創造された世界とそこの中にあるすべてのものを支配するようにとの命令は神の家令としての人の立場を確立するものです。「これにみ手のわざを治めさせ、よろずの物をその足の下におかれました。すべての羊と牛、また野の獣、空の鳥と海の魚、海路を通うものまでも」（詩八：六―八）とある通りです。しかし、ヘブル人への手紙の著者がこの箇所を解説しているように「今もなお、万物が彼に服従している事実を、わたしたちは見ていない」（ヘブ二：八）のです。もちろん、ヒトが神の家令として失敗した所に問題があります。神の下にあって地をよく用いる代わりに、ヒトは神を否定し、家令の立場を悪用してしまいました。しかし、この太古の委任状は決して廃棄されていません。したがって、人類にはなおその責任があります。科学および技術に基づく企画は、地球とその居住者に対する、人に与えられた神の命令を意味します。もし、ヒトが造り主の正直なよいしもべとして深い信頼をもって科学や技術上の企画をするなら、このような探求は、計り知れないほど多くの生産的かつ効果的なものであることがわかるでしょう。

ヒトにこのような命令を授けてのち、神は生活必需品の準備、すなわち、食物について語られましたヒトはなすべき働きをもち、その働きをつづけるために、エネルギーを繰り返し新しく取り入れる必要があります。このエネルギー供給のために、動物の場合と同様に、ヒトの身体の一部として驚くべき消化器系と内

在エネルギー変換装置が神によってデザインされ準備されました。このエネルギーは、創造の第三日に神が確立された生圏の果実や青草によって絶えず供給されるはずでした。これらの植物は、実を結び種を生じることで自己を再生産するように計画されていたので、植物の供給が終わることはあり得なかったのです。さらに、ヒトが地に広がり地を満たすにつれて、「地の表面のどこでも」食物は入手できたはずでした。元来地上には砂漠もヒトの住めない所ありませんでした。

動物もまた、「すべての青草」を取って食物とするはずでした。「すべての青草」ということは、明らかに草を含むすべての緑の植物を意味したことです。動物もヒトの指示の下になすべき働きをもっていました。九章二節にあるように、世界が呪いの下にあって動物がヒトを恐れこわがるようになって数千年たった今の時代には、種類の異なる動物の元来の性質と神の意図された目的を正確にきめることは不可能で実に困難です。

創造の時には、ヒトも動物も動物性の食物を食べるように意図されていなかったことは、この一節からも明らかです。ヒトに関する限り、あとで検討するように、ノアの洪水の時（創九：一）から変えられました。洪水前のある人々が、神の命令にさからって動物を食物としたかどうかは語られていませんが、四章二〇節に、ヤバルが家畜を飼う者となっていたと紹介されているのでその可能性はあります。

肉食性動物に関する限り、肉を食べたいという欲求が、呪われた時かあるいは、ノアの洪水の後かを境に発展したに違いありません。もちろん、今日でさえこれらの動物は、もしそれ以外に方法がなければ植物を食べて生活できるし、また生活することでしょう。動物の牙やかぎ爪は、元来あったものか、劣性形質であった牙やかぎ爪が後に選択によって優性形質となったものか、呪いに続いて起こった突然変異によって生じた

のかについて、真実のところは今後の研究に待たなくてはなりません。同じように今日見られる「自然の均衡」がいろいろな環境のもとでどのように進展し整えられたかに関してもはつきりしたことはわかりません。もしかすると、増え広がりすぎる多数の下等動物を自然の均衡によって肉食動物が抑制しているのかも知れません。少なくとも各種の動物が多産であることを考慮すると、太古のあらゆる環境における「均衡状態」は、現在とは大幅に異なっていた可能性があり、したがって、捕食は必要とされていなかったし、また望ましいことでもなかったのです。

聖書は、将来、世界にイエス・キリストが再臨し地上に太古の完全さの幾分かを回復したのちは、動物間に、または動物とヒトとの間に再び捕食とか争いはないだろうと予告しています（イザ一・六〇九、ホセ二・一八等参照）。

一章三二節〜二章四節 神が造ったすべての物を見られたところ、それは、はなはだ良かった、夕となり、また朝となった。第六日である。こうして天と地と、その万象とが完成した。神は第七日にその作業を終えられた。すなわち、そのすべての作業を終って第七日に休まれた。神はその第七日を祝福して、これを聖別された。神がこの日に、そのすべての創造のわざを終って休まれたからである。これが天地創造の由来である。（協会訳）

神は今やそのわざを終えられましたが、神がお造りになったもののありのままの姿をご覧になって「休み」に入られる前に、神はまずすべてお造りになったものを見渡し、すべての創造のわざを「はなはだ良し」と

宣言されました。神はお造りになったすべての過程で六回「よし」と言われましたが、今やその各々の部分は他の部分と完全に調和を保っており、そこに住む生物が豊富に完成されたのをご覧になりました。神は大きな喜びをもってご覧になりましたが、それは文字通り「はなはだ良かった」のです。それはすべて文字通り「夕となり、また朝となった。第五日（a fifth day）である」などと宣言されて記述を終えられましたが、今や「夕となり朝となった、第六日（the sixth day）である」と言い（定冠詞 the は、この時初めて用いられており）、このようにして、また創造のわざの完成をさらに強調しています。

この句だけで、地質時代を創世記の記録にある創造の概念と調和させようとするどんな学説をも誤りとするのに十分です。宇宙にあるすべてのものは（次の節は明らかにその中に天の万象を含めています）、この時点でお、何事でも知っておられる神御自身の判断で、はなはだ良かったのです。被造物のどれをとっても良くないものは何一つありませんでした。例えば生存競争も、疫病も、汚染も、天災（地震や洪水など）も、不均衡、不調和、無秩序、罪、中でも死はなかったのです。この時点では、サタンさえもまだ良い天使で、彼の反逆と墮落は後に起きたに違いありません。

もちろん、化石はしばしば激烈な突然の死を物語っています。

化石はまた疫病と損傷、暴風と激動―簡単に言えば現地球のような世界、すなわち、被造物全体が共にうめき共に産みの苦しみを続けている世代（ロマ八・二三）のことを物語っているのです。なぜなら、罪がヒトを通して入ってきたし（ロマ五・一二）、ヒトが罪を犯す前、被造物全体は良かったのですから、地殻の堆積岩の中にいま見いだされる化石は、ヒトが罪を犯した後のある時に形成されたはずだということは実に明らかです。化石は間隙説で言うように創造の六日間の前とか、日Ⅱ時代説や漸進的創造説で言っているように

創造の六日間に堆積したはずはありません。

ヒトに似た生物と共に無数の動物の遺骨が岩石の中に取り込まれているのを見、また闘争と労苦の世界を
ご覧になった上で、神はどうしてすべてはなほ良かったと記すことができたのでしょうか。このような示
唆は結局神を極悪非道の悪者にしてしまいます。すなわち、一羽の雀をさえ気にかけられる恵みに満ちた神
とは言えません。また、創世記の一日を一地質時代として創造と絶滅を繰り返す（地質時代の概念）ながら
世界を完成させた方を、どうして愛と憐れみの神と言い得ましょう。神の知恵は完全であつたので、地質時
代の概念である創造と絶滅よりも確かにもっとよい方法を考え出せたことでしょうか。全能の神なので、この
ようにしてもっとよりよい方法で創造する能力を十分に持っていたはずで、聖書で啓示されている神は、
無限の秩序の神であつて混沌の神ではありません。化石の記録が人類以前の時代の真実の地球の歴史である
とするなら、それが意味する無駄な非効率性を、聖書の神に帰することができ得ましょうか。

後で見るように、ノアの時代に起こった大洪水による大激変で、堆積岩やそこに含まれる化石記録などす
べての現象を十分に説明できます。しかし、ヒトの創造の時、宇宙全体は美しく完成されていました。神御
自身は心を尽くして人のために最善をしてくださいました。

この節は、一章のまとめですが、前にすでに検討したように区切りはこの三一節でなく、二章四節の中ご
ろの方がよいでしょう。最初のトーレードス Toledoth（経緯）という記事、すなわち、「これが天地創造
の経緯である」と四節に記されています。以前に検討したように、この宣言はこの前に書かれている部分に
関し著者が署名し同意していることを表わしたものでしょう。この場合、人間の著者はいないし、創造の
わざを観察していた人もいなかったもので、後で創世記に出て来る他の十のトーレードスと異なつて人の名

前は載っていません。この記述はある族長の系図や歴史記録ではなく、宇宙自体の系図に関して述べている
のです。

二章一―三節は、すべてのものを創造される神のみわざが今完成されたというすばらしい断言的なまとめ
です。神はわざを終えられたことを四回にわたつて明確に示し、三回、これは神のすべての働きを含むこと
をはつきりと述べています。これらの点が明示されている理由は、宇宙に現在起こっている過程は創造の際
に起こった過程ではなく、したがって、万物の起源について神の啓示なしに人が理解するのは絶対不可能で
あることをはつきり示しているのです。このことを理解することは、人にとって非常に重要だからです。古
代の異教の進化論者も、現在の科学的進化論者も、共にこのばかげたことを繰り返しています。万物の起源
や物の基本的意味を、独立した宇宙の中で説明しようとしませんが、この企ては全くばかげたことで不可能です。
宇宙で現在観察できる過程は、例外なく熱力学の二つの普遍的法則で規定されているように保存と崩壊の
過程です。一方、創造の時に起こった過程は革新と統合、すなわち、創造と製作の過程で、この過程は熱力
学の法則とは全く反対です。科学はただ現在の過程で近づき得ることだけを取り扱えるのです。保存と崩壊
が普遍的法則なら、この過程で宇宙を生じ得ないことは、故意に真実を無視しようとしなければすべての人にとつ
て、全く明らかだからです。宇宙を生成するにはほとんど無限の革新と統合の過程が必要です。

したがって、私たちがこの創造の時期のことを少しでも知ろうと願うなら、熱力学の二つの法則が要求し
ているような事実を照らして、宇宙を生成するような時期があつたに違いないことがわかります。これ以上
に、宇宙の生成に関する知識を得るには神の啓示を待たなければなりません。そして、一章に明快に記され
ているこの驚嘆に値する記事は、神が私たちに明かした万物の創造と形成の記録です。すなわち、どれくら

いの年月を要したか、そこではどのような事件が起こり、分離がなされたか。発生の順序はどうであったか。種々の構成成分の關係はどうであったか、また、科学的觀察だけでは決して決定できない他のすべての資料は何であったかなどです。この神の創造のわざの完成は、新約聖書でも強調されています（ヘブ四・三、四、一〇、一一・三、エペ三・九など）。

創世記二章一節で述べられている「天の万象」は、主として星を指して言っています（申四・一九、ネへ九・六、エレ三三・二三など）が、また天使のことをも暗に言っていると云ってよいでしょう（Ⅰ列二三・一九、Ⅱ歴一八・二八、ルカ二・一三など）。天使の住まいとその力の範囲は星々であったかも知れません。

第七日は、他の六日のように形式通りの記述で終わっていません。しかし、この事實は、一部の「日」時代説の提唱者が示唆しているように、第七日が今も続いていることを意味している証拠ではありません。聖書は「神は第七日に休み続けておられる」とは言われなくて「神は第七日に休まれた」と述べています。出エジプト記三二章一七節では「七日目に休み、かつ、いこわれたからである」とさえ言っています。

神の創造のわざは終わりましたが、神はすぐに大いなる贖いのわざに取り組まなければなりませんでした（ヨハ四・三四、五・一七など）。ついに、神の御子、贖い主が十字架にかかって「すべてが完了した」と勝利の叫びを上げられた時、その贖いのわざも終わりました（ヨハ一七・四）。そして、もう一度神は、新しい週の第一日の夜明けまで、ヨセフの墓にあつて安息日を休まれたのでした。そして、新しい週が、新しい時代が始まったのです。